



見えていますか

小学生の5~6年生の頃だったように思うが、授業の中でも、絵を描いたり、工作をしたりする図画工作（図工）の授業が好きだった。その授業は国語や算数を勉強する教室を離れて、図工の部屋とよばれる教室に移動して行われた。図工の先生の好みだったと思うが、その部屋には何枚かの絵が飾られていた。中でも部屋の入口付近に貼ってあった一枚の風景画は、芝生の上に大勢の人々が集っているパステル調の絵であったが、無数の細かい色点が重なり合って構成され、何とも言えない色調の絵であった。その絵の作者や作品名は分からなかったが、小学校を卒業すると、その絵を目にすることもなくなり、自分の意識からは消え去っていった（と思う）。

それからずっと年月が経って（確か大学生か大学院生だった頃）、何かの機会に美術館に行った際に、売店に並んでいた書籍をパラパラと眺めていたときのことである。その中の1ページに、「ああ、あのときの絵だ」とまさに小学校の図工教室の入口付近に飾ってあったあの風景画を見つけたのであった。それはジョルジュ・スーラという画家が描いた「グランド・ジャット島の日曜日の午後」という絵であった。スーラは点描画とよばれる手法を生み出した画家で、「グランド・ジャット島の日曜日の午後」は彼の代表作である。絵画に詳しい方なら、その絵を御存知の方もおられるだろう。

私はふと考えた。小学校のあの図工教室にいた大部分の生徒たちの目には、入口付近に飾ってあったあの絵が目に入っていたことだろう。しかし、年月が経って私のように

あの絵のことを思い返す人はどの位いるのだろうか。そもそもなぜ、私はその絵のことを覚えていたのだろうか。当時のことを正確に思い出せるわけではないが、私は特別にその絵が気に入っていたわけではないように思う。それでも長い年月を経て、その絵のことを思い返すことができたのはなぜだろうか。自分では意識はしていなかったが、見たこともないような点描画の印象的な色調が、私の記憶に残った一因なのかもしれない。確かに同じものを見ても感じ方が違ったり、記憶に残ったり、残らなかったりするのには普段の生活でもよくあることであろう。

例えば研究室で、学生達にある2つの標本を顕微鏡で見せて両者の違いが分かるかを聞いたことがある。違いが分かる学生もいたし、そうでない学生もいた。違いが分かるかどうかは、学年（研究室でのキャリア）には依存しなかった。研究室に入って間もない学部4年生でも違いが分かった人もいれば、大学院の博士課程の学生でもその違いが分からない学生もいた。同じものを見ているはずなのに、そして一旦気がついてしまえば確かにそれと分かるものなのに、認識に違いが見られるのはどういうわけか。もしかしたら今、自分の目の前にある実験データの中にはとても大事な情報が含まれているのに、実際には自分がそれに気が付かないだけかもしれない。その当時は気が付かなかったけど、今見返したりすると、昔の実験データの中に重要な点を見いだしたりすることがあるかもしれない。そういう意味でも実験データを正しくきちんと残しておくのは大事なのだ。実験データが示す重要なシグナルに気が付くことができるように、自分の頭の中の引き出しを色々と準備・整理しておくのも必要だろう。そして自分ではたいしたことがないと思う知見でも論文として世の中に公表すれば、もしかしたら他の誰かが自分とは違う見方をして、大きく発展させてくれることもあるかもしれない。そんなことを考えながら、今日も実験データを見返したりしている。

(じょーじ)